

公明党の自立路線時代(3)

平野 貞夫
元参議院議員

コロナ禍で変わるか創価学会

突然だがコロナ禍で変化の兆しを感じる創価学会を論じてみたい。

2019 (令和元) 年7月から、ユーチューブのデモクラシータイムスで「3ジジ放談」に出演している。早野透氏の司会で佐高信氏の激弁と私の訥弁で「時事放談」の真似事である。安倍政権の末期頃から10万人前後の視聴者に楽しんでもらっている。

2月23日の生発信では、佐高氏の最新作『佐藤優というタブー』(旬報社)を話題とした。佐藤優氏といえば、クリスチャンでありながら創価学会を世界宗教として高く評価する奇人である。佐高氏は共著の対話本も数冊あり、彼の著作を熟読しているが、私は1冊

も読んでいないので論評する資格はない。

佐高氏は著書の冒頭で「佐藤優は雑学クイズ王」と名付けている。私が「誉めすぎだ」というと、「代案を言え」と迫る。「言動を見ると思想に骨がない。100円ショップの知識人だ」と言うのと納得したうえで、「自公政権のお抱え知識人」と断じた。

そう言えば自公政権を裏で支える人間に二人の佐藤がいる。創価学会副会長の佐藤浩氏と、創価学会の守護神・佐藤優氏である。佐藤副会長は第二次安倍政権以降、菅官房長官と「S—S」ラインで、政権運営や選挙対策で安倍政権のゴリ押しを創価学会を通じて公明党を説得というか、ねじ伏せてきた。それを佐藤優氏が仮想知識人として正当化してきた経緯がある。

菅政権発足以後は、菅首相と佐藤副会長のS—Sコ

ンビが、政権をしっかりと支えていくはずであった。ところが佐藤副会長が、2月で創価学会の職員を定年退職するとの情報である。通例なら囑託として残り、重要業務を引き続き担当すると思いきや、佐藤氏は本人の意向でまったく別世界で生きていくとの見方がある。となるとS—Sラインは機能不全となる。余人をもつて代えがたしの仕事ゆえに、いくつかの問題が見え隠れしている。

例えば3月21日に行われる千葉県知事選挙で、自民党が擁立する候補の推薦に公明党が抵抗している。理由は「白須賀衆議院議員問題」とのこと。千葉県は菅首相の利権地として知られており、S—Sラインが健全ならばこんな問題は起こりえない。それだけに帰趨が注目される。

もう一つは「大阪都構想問題」だ。2度の住民投票で否決された問題を、府と市の条例で実質的に「市の資産を府の資産とし、府の財政を見せかけの正常とし、外資に売りIRや万博を強行しよう」とする大阪維新の会の犯罪的行為を、「維新の会↓菅官房長官↓創価学会」のラインで、大阪市の公明党に強要して4月から実施しようとの動きがどうなるかだ。

この二つの成り行きによって、創価学会がコロナ禍で自公路線を続けるのか、変化していくのか。変化するとなればどのように変わるのか。たしか「民衆の福祉と平和実現」が、創価学会が公明党を結党した際の国民との約束だったはずだが。

矢野委員長・大久保書記長体制

1986 (昭和61) 年12月5日の第24回公明党大会で、竹入義勝委員長体制が矢野絢也委員長体制に変わり、大久保直彦書記長・市川雄一対委員長時代の時代となる。20年前の1967 (昭和42) 年、公明党が衆議院に進出して以来の執行部の世代交代であった。

1985年から始まる昭和60年代は、昭和天皇の崩御により3年と8日で平成の年号となる。この3年8日間という時間が、わが国の混乱の原因をつくることになる。まずその要点を検証してみよう。

1980年頃から始まった中曽根行財政改革による民営化は、わが国が未曾有のバブル社会と化し、日米経済摩擦や為替問題が沸騰する中で行われた。土地や証券の異常な値上がりで、多くの日本人が金権に酔いしれるようになる。米国で『ジャパン・アズ・ナンバ

「1」との出版もあり、日本人の精神的驕りが目立った。ロッキード事件で田中角栄元首相が第一審で有罪となり、田中派が混迷するなか、田中元首相が脳梗塞で倒れ、田中支配から中曽根首相は脱出する。1985（昭和60）年2月27日であった。

公明党の矢野—大久保体制がスタートしたのは、その年の暮れであり、中曽根首相が権勢を恣にした時期にあつてゐる。中曽根政治の憲法無視の国会運営に与野党が困り果て、私はさまざまな問題解決の方策を持ち込まれるようになる。私は頭にきたが、逃げる」と議院民主政治の崩壊になりかねない。それを理解してくれたのは小沢一郎さんだった。

毎日が国会職員法違反をやるような状況となり、そこで臆首になつてもよいが、可能な限り記録を残そうと日記を付けることにした。それを始めたのが1985年2月24日であった。その3日後に田中元首相が脳梗塞で入院することになる。当時の国会内の混乱が記録として残っている。

この日記は、私が衆院事務局を辞める寸前の1992（平成4）年2月4日まで続いている。内容の大部分は公明党と小沢一郎氏からの問い合わせだ。竹下登

て意見を聞かれた。（以下略）

実は日記には書いていない面白い話がある。市川国対委員長からいきなり厳しいジャブを浴びせられたのだ。

「君のことは公明党内で、諸葛孔明」といわれているが、私はそんなことで国会対策はできないと思つている。この人の政治論を参考にするつもりだ」と、丸山真男の書物を2冊、私の前に出した。私は、男子部参謀室長という創価学会幹部会員の丸山政治学論評価に腰を抜かすほど驚いた。そこで「丸山政治学は私も政治学修士コースで、弟子の先生方に学びました。政治思想史の研究では尊敬しますが、国会運営では理想主義的すぎて役に立ちません。私は毛沢東の『矛盾論・実践論』を参考にしています」と反論した。

座が一瞬、白けたが、大久保書記長がそつなく収めた。正直言つて大変な世代交代になつたと感じた。

翌5日午後5時、党大会が終わり2年間にわたる国対委員長の大任を終えた権藤恒夫氏と会う。労をねぎらうと丁寧な礼を言われ、「竹入前委員長から、矢野新体制を裏で支えろと言われ、中央執行委員会でも労働局長として残ることになった。市川国対委員長に党内が心配しているので、従来と同じように私が裏で相談

首相や宮沢喜一首相から意見を求められたこと。社会党・民社党・共産党からの相談のあつたこと。当時の衆院事務局長からの相談などがある。この日記を京都大学で憲法と政治学を担当していた助教の2人が校訂して、『平野貞夫・衆議院事務局日記』全5巻を「信山社」から出版してくれた。この全5巻が全部そろつたのは、2020（令和2）年の年末であるが、1985年から1991年までの公明党の国会での動きは、この日記が詳しく事実を記録している。

市川国対委員長の初対面は丸山政治学論

第24回公明党全国大会の初日の86年12月4日午後1時頃、書記長に内定した大久保衆院議員から電話がある。「今夜、会いたい。虎ノ門の〆辻留〆に来てほしい」とのこと。断れない雰囲気だったので応じることにした。その時の様子を前述した『衆議院事務局日記』を開けて見てみよう。

○12月4日 午後7時半、辻留〆で、公明党大久保（直彦）氏から、内定した池田（克也）副書記長、市川（雄一）国対委員長、近江（巳記夫）議運理事を紹介される。新体制での国会対策につい

に乗るのでよろしく」との話があつた。

1987（昭和62）年が明け、中曽根内閣は前年の「死んだふり解散」で、衆参両院の絶対過半数を得た勢いを憲法原理破壊へと向けていく。それは同日選挙の際、「国民が反対する大型間接税は一切やらない」との公約を覆して、「売上税制度」を通常国会に提出すると言明し、自民党の一部も含め野党側は大反対を行うことになる。

ところが1月26日に再開された第108回国会の中曽根首相の施政方針演説で「売上税」という言葉が入っていない。野党は問題として代表質問に入らないと抗議。大混乱の「売上税国会」が始まる。代表質問ができないという異常事態の中、1月27日大久保書記長から会いたいという電話。「事務局日記」に、午後7時から、辻留〆で大久保書記長と会つたことが記されている。懇談要旨の中に、

○大久保 市川国対委員長の発想が堅くてどうにもならない。

との大久保書記長の愚痴が記されている。暮に権藤恒夫議員が私に語つた公明党新体制の問題が早くも出てきた。